

基礎技能（音楽）と表現との関連性について

吉 森 恵

The interrelation between basic skill (music) and child's ability of expression

Megumi YOSHIMORI

The School that trains childcare-workers holds an important place in offering students various professional educations. This paper is intended as an examination of what basic skill (music) is more effective for students to learn in order that children may develop their ability to express themselves.

Key words : basic skill (music), piano, child's ability of expression

基礎技能（音楽） ピアノ 子どもの表現

1. はじめに

保育所保育指針は、平成20年に告示され、平成21年4月1日から適用されている。『保育所保育指針解説書』¹⁾の中では、改定の背景に、子どもや子育てなど家庭を取り巻く環境の変化がある。そのため、子育ての不安や悩みを抱える保護者が増加し、養育力の低下や児童虐待の増加などが指摘されている。また、乳幼児期は、子どもが生涯にわたる人間形成の基礎を培う極めて重要な時期であるため、保育所への期待が高まり、質の高い保育が求められる。そこで、保育所の役割・機能を再認識し、保育内容の改善充実を図ることが重要になってきていると述べている。

子どもたちは、生活時間の大半を保育所で過ごすため、保育者の子どもに与える影響は大変大きいものがある。保育の目標の中に、「様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと」²⁾と示

してあるが、保育者養成校では、学生たちが現場で子どもたちの感性や表現力を育ませるためにどのような指導がより必要であろうか。

今回は、子どもの表現の一つである歌う活動の援助をするための基礎技能（音楽）が、保育所等で実践をする上でどのような方法を身につけさせればより効果をもたらしうのか検討したい。

2. 子どもの音楽表現と保育者のかかわり

子どもたちの表現活動は様々であるが、音楽が子どもたちの表現活動にどのような影響を及ぼすのであろうか。吉森、奥（1995）³⁾は、2歳児が自由遊びの中でどのような「場」でどんな「歌」を口ずさんでいるかを調査している。その中から自由遊びの中で2歳児の自発的音楽行動の出現は、リラックスできる場があること、そのため家庭環境の影響も大きい。また、保育者が教える歌についても子

どもたちが楽しみながら歌えるようにすることは当然のことであるが、子どもたちの何気ない行動も見逃すことなく保育者が受容し、子どもの輪の中に入っていき努力が必要であると述べている。そして、子どもの自発的音楽行動は保育者から教えてもらった歌などを、自由遊びの中で自分なりに即興で楽しんで歌う場合も多かった。

次に、筆者が見学した保育所の生活発表会での一例をあげる。

兵庫県S市のH保育園では、1年を通して毎月クラスで絵本を決め、同じ絵本を1ヶ月間毎日読み聞かせをしている。そこから、年長クラスは子どもと一緒に物語の内容を話し合い、歌も自分たちで作成し、身体表現も子どもたちの話し合いの中から自然と演出されたものである。その演技は、歌を歌いながらの場面も多く出てくる。演技の場での歌も子どもたちが考えて作ったものであるため、保育者はその歌の伴奏を自分で作曲しているのである。しかし、その様子をみると、保育者の伴奏が子どもたちの動きに大変関係していることがわかった。生活発表会が催されるホールには、ピアノはなく、電子オルガンが置かれていた。電子オルガンの特徴は、上鍵盤は右手でメロディーを下鍵盤は左手で伴奏を、ペダル鍵盤は足でベース音を弾くのが一般的である。また、多彩な楽器の音色を奏でることができる。

例えば、A保育者の電子オルガンの伴奏は、子どもの歌に合わせてながら効果音も取り入れ、音色に変化をつけながら電子オルガンの機能を上手に使用しているため、子どもたちは生き生きと演じていた。また、保育者の中には一生懸命に伴奏はしているのだが、電子オルガンに慣れていないようで、子どもたちの動きについていくのが精一杯であり、保育者が子どもの動きに合わせるのではなく、保育者

の伴奏に子どもたちが合わせているため、子どもたちの動きがぎこちなく思えた。

子どもの生活発表会における表現活動は、保育者の伴奏で随分違ってくるのではないかと感じた。また、生活発表会の場所であるホールには、ピアノはなく、電子オルガンだけが置いてあったため、電子オルガンに不慣れた保育者は練習が大変であったと感じた。園の方針であったかもしれないが、一つの楽器に固定せず、保育者の演奏できるリズム楽器なども活用し、保育者が自信をもって演奏することができれば子どもたちの動きにもっと変化が出るのではなかろうか。

3. 保育者養成校での基礎技能音楽

本学では、児童福祉コース選考の要件として、①保育士国家資格取得の志望動機が明白で、意欲と熱意を持ち、これにふさわしい資質を有する者。②1年次で開講する社会福祉士国家試験科目及び保育士指定科目の単位を修得するとともに、ソーシャルワーク実習(児童養護施設)履修の強い意志がある者。③成績が優秀で、学習態度が良好である者を選考要件に挙げている。また、選考要件の中に、ピアノの経験は問われていないため、児童福祉コースに選考された学生の中で、ピアノ未経験者は保育士の資格を得るために短期間でピアノの課題に挑戦しなければならない。

ピアノを習う時といえば、最初は、『バイエル教則本』がよく使用されていた。現在でもこの教則本が使用されているが、その他の教則本が使われるケースも多くなってきている。また、その後『ブルクミュラー 25の練習曲』、『ソナチネアルバム』、『ソナタアルバム』、『ツェルニー 30番練習曲』、『ハノンピアノ教本』などが併用されながら、使用されることが多い。『バイエル教則本』のテキストは、

片手から練習し、徐々に両手で弾くことができるようになっていく。本学では、学生が練習してきた曲に限られた授業の中で指導しなければならないため、より効果的なテキストはないかと考え、保育者養成校でピアノ指導を28年間経験してきた筆者は『教職課程のための大学ピアノ教本バイエルとツェルニーによる展開』⁴⁾のテキストが理解しやすく短期間で基礎技能が身に付くと考え使用している。その特徴としては、難易度別による曲の配列、左手の伴奏形の集中的な取り扱い、歌唱教材の中心となる四分音符・八分音符のリズムを早期から学習でき、歌唱教材で多く扱われるへ長調の曲の重点的な配列、実際の曲に即して基礎知識面の充実が挙げられている。このテキストは、最初から両手で始まり、初歩の学生にとっては戸惑う者もいるが、最初の授業で説明をすると、ひたすら練習し、1か月ぐらいで、少しずつ弾けるようになってきている。

また、『教職課程のための大学ピアノ教本バイエルとツェルニーによる展開』のテキストと併用して、子どもの歌の弾き歌いを学ぶために、『和声伴奏による幼児のうた100曲』⁵⁾の楽譜を使用している。子どもの歌の簡易伴奏は、近年、多数出版されてきているが内容は様々である。このテキストは、幼稚園でよく使われている曲を集めて、基本的に右手でメロディーを弾き、左手を和音伴奏にし、初歩の人でも弾けるように原曲を簡単なコード進行にしてある。また、演奏する学生のレベルによって伴奏を工夫して演奏できるように伴奏例といろいろな伴奏形が書かれている。初歩の学生は、簡易伴奏と書かれたテキストを使用しても、伴奏譜が四分音符、八分音符、十六分音符と入り混じってくると、最初は簡単と思って弾いていても、途中で躓き最後まで弾けないことがある。

本学の基礎技能（音楽Ⅰ・Ⅱ）の試験は、教則本の中の曲と、童謡の弾き歌いを課している。教則本の曲は表情豊かに演奏できている学生であっても、童謡の弾き歌いとなると、伴奏に躓き途中で止まってしまう場合や、口は動いているが演奏に集中し、小声で歌が聞き取りにくい場合もある。そのため、簡単なコード進行の伴奏譜を併用し、全員が表情豊かに子どもたちに聞こえる声で弾き歌いができることを目指している。

そこで、本学学生の実態を知り、基礎技能（音楽Ⅰ・Ⅱ）指導に役立てるため、平成21年4月下旬、本学児童福祉コース基礎技能（音楽Ⅰ）を受講している学生26名に、基礎技能（音楽Ⅰ）の授業を2回受講した後に、下記の内容でアンケート調査を実施した。

アンケート内容は、①高校で音楽に関するクラブに所属していたか、②大学に入学するまでにピアノは習っていたか、③楽譜はすぐに読めるほうであるか、④現在の『教職課程のための大学ピアノ教本バイエルとツェルニーによる展開』の進度、⑤「お花がわらった」（保富庚午作詞、湯山昭作曲）の曲を練習すれば原曲で弾くことができる、⑥『和声伴奏による幼児のうた100曲』の中の「おはながわらった」の曲を練習すれば弾くことができる、⑦『和声伴奏による幼児のうた100曲』の童謡100曲のうち練習すれば何曲弾くことができるかの7項目である。

童謡曲を練習すれば弾くことのできる曲が何曲あるかに対し、練習すれば弾くことができると思っている学生は、大学に入学するまでにピアノを習っていた、楽譜を読めるほうであると思っている、現在のレッスンの進捗状況に関係することがわかった（図1参照）。また、4月によく歌われている曲で『和声伴奏による幼児のうた100曲』の中にある「おはながわらった」の曲は練習すれば弾くこと

ができるかの質問に対し、全員が練習すれば弾けると答えた。この本の伴奏譜は二分音符と四分音符のみのコード進行である。「お花がわらった」の原曲は⁶⁾、前奏の右手の部分に6連音符が入っており、メロディー部分にも和音が使用されている。また、伴奏には、四分音符、八分音符、十六分音符、付点八分音符、付点二分音符が使用されている。

「お花がわらった」の原曲に関しては、図2に示すように、大学に入学するまでにピアノを習っていた学生と習っていなかった学生とでは差はなかったが、現在の教則本の進度

との相関はあった。

現在の教則本の進度と『和声伴奏による幼児のうた100曲』の楽譜の中で練習すれば弾くことのできる曲数については、図3に示すように練習すれば全曲弾けると答えた学生は教則本が進んでいる学生に多くみられた。また、初歩の学生であっても練習すれば40曲ぐらいは弾けると答えており、これから頑張る練習をすれば自分にも何とか弾くことができると思っていることがわかる。

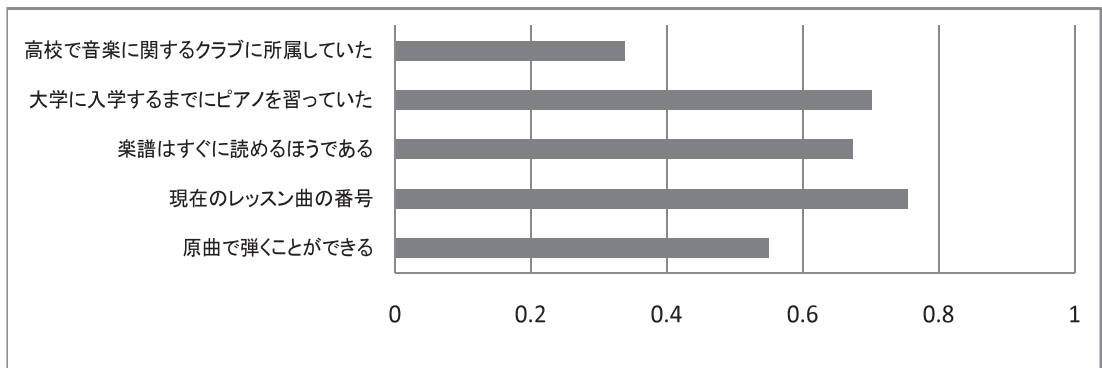


図1 童謡曲を練習すれば弾くことのできる曲数との単相関係数

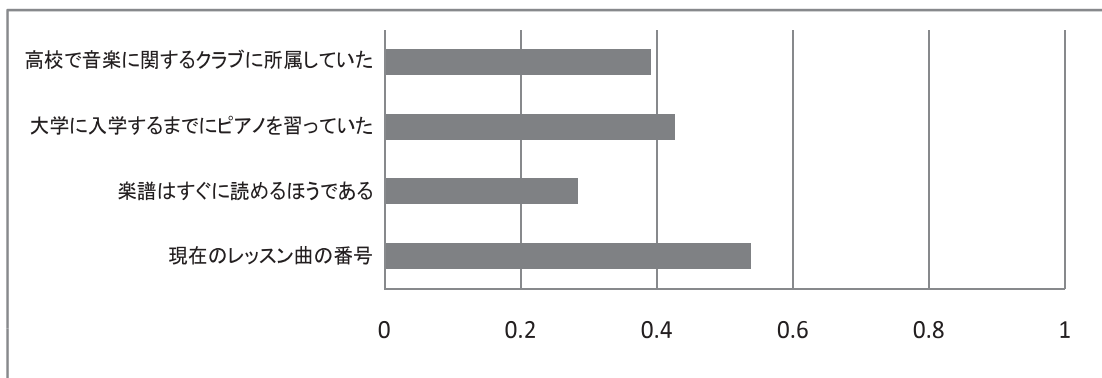


図2 「お花がわらった」の原曲と簡易伴奏との単相関係数

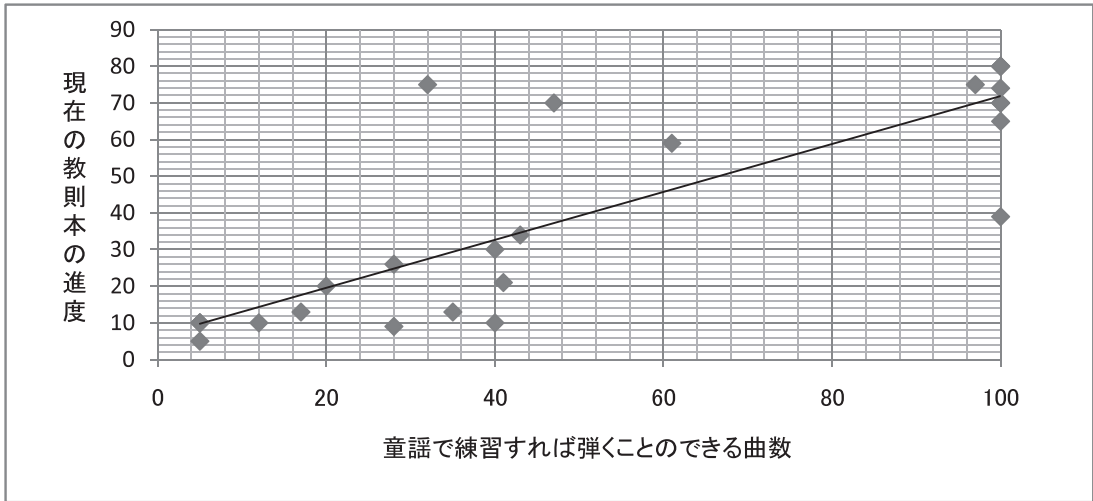


図3 現在の教則本の進度と童謡曲で弾くことのできる曲数との散点図

4. まとめ

将来、保育者になることを希望している学生は、子どもの前で弾き歌いをする機会が増える。しかし、園によって使用している曲は様々である⁷⁾。そのため、保育所に就職して初めて知る曲もでてくる。ベートーベンのソナタ、モーツァルトのソナタの演奏ができるから子どもの歌の伴奏が上手とは限らない。宮脇 (2001)⁸⁾ は「保育者にとって必要とされる音楽的能力とは、古典的なドイツの教材が正確に弾けることではなく、幼児一人一人を見守りながら弾き歌いをし、幼児の音域に合わせて時には移調ができて、更に身体表現においては、その動きに合わせて即興的に演奏ができるといったものである。そのような能力を育成するためにはコードの学習こそが第一にされるべきである」と述べている。もちろん、基礎をしっかり身につけさせるためにも教則本を使いながら指導をしていかなければならないが、実践で子どもの歌の伴奏、動きの伴奏が即興で弾く力をつけるためにも、童謡に関しては最初から自分には難しすぎて

できないと学生が拒絶するような伴奏曲は使用しない方がよいのではなかろうか。「簡易伴奏による」と本のタイトルに書かれていても、よく見ると初歩の学生は途中で躓くだろうと思われる箇所が意外と多い。

保育者養成校の学生たちに大切なことは、保育現場でよく歌われている曲をより多く弾き歌いができるようにするためにも、簡単なコード進行の曲で弾き歌いができるようにし、原曲でも十分弾き歌いができる学生には両方できる指導をすべきであると考えます。また、本学で使用している子どもの歌の弾き歌いのテキストは簡単なコード進行であるため、学生は初歩であっても練習すれば弾けるであろうと感じている者が多くいた。初歩の学生には、初めてという不安を取り除き、基礎技能をしっかりと学ばせ、弾き歌いで子どもの伴奏もできるという自信をつけ、保育現場で子どもの状態に応じ、即興演奏ができるような力を身につけさせることが今後の課題である。

<参考文献>

- 1) 厚生労働省：保育所保育指針解説書，8
-31，フレーベル館，2008
- 2) 同上書 21
- 3) 吉森恵、奥美佐子：2歳児が生活の中で
示す興味と表現に関する研究2，20-21，
日本乳幼児教育学会 第5回大会研究発
表論文集，1995
- 4) 大学音楽教育研究グループ：教職課程の
ための大学ピアノ教本バイエルとツェル
ニーによる展開，教育芸術社，2007
- 5) 在原章子、菊本哲也、柳田憲一、山内悠
子，新版和声伴奏による幼児のうた100曲，
全音楽譜出版社，2008
- 6) 中・四国大学音楽教育学会，楽しくなる
音楽講座，14-15，エー・ティー・エヌ，
1991
- 7) 吉森恵：幼稚園における幼児の歌・手遊
びの現状について，91-99，姫路学院女
子短期大学紀要第20号，1993
- 8) 宮脇長谷子：保育者養成におけるピアノ
指導の現状と課題，1，静岡県立大学短
期大学部研究紀要15-W号，2001